9 月 17 日のメッセージ

聖書：コロサイの信徒への手紙　3：　12 – 17

「愛はすべてを完成させるきずな」

小学生の頃、テレビの視聴制限があった我が家で、密やかな楽しみは「親が帰ってくるまでの間にテレビを視る」ことでした。特に、学校がお昼で終わる土曜日はチャンスが多くありました。関西らしく、吉本新喜劇が毎週、放送されていましたが、どうもなじめず、専ら楽しみは宝塚歌劇の放送でした。大アップの舞台化粧はちょっと引きましたが、作品は実に面白かった。中でも記憶に残っているのは、『ベルサイユのばら』。今でも、『愛あればこそ』のメロディーが頭の中でループしています。

大学生になってキリスト教に触れた時、「キリスト教は愛の宗教である」と聞かされました。しかし、聖書を開いても、美しい恋愛物語は出てきません。今日の聖書にも「愛」が何度も出てきますが、「どうやら思っていた『愛』とは違うらしい」と気づいたのは、しばらく経ってからでした。

では、「愛」とは何でしょうか。

旧約聖書では、ヤコブの子どもたちが末弟ヨセフを妬んで殺してしまおうとする場面が出てきます(「兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、相談した。」創世記 37:18-19)。その時、兄弟の一人であるルベンだけが「命まで取るのはよそう」と言います(「ルベンはこれを聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。『命まで取るのはよそう。』」創世記 37:21)。父であるヤコブが、ヨセフのことをどれほど大切に思っているかを知っているからこそ出てくる言葉です。

この「大切に思う」ことが「愛」なのだとイエスも言われています。

いわゆる「放蕩息子のたとえ」でイエスは、財産を分けてもらいながら勝手に父の元を離れた息子を、その父が限りなく大切に思っている姿を描き出します(「そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」ルカによる福音書 15:20)。そのことを不満に思う兄息子の気持ちを差し置いてまでも、弟息子の帰還を喜ぶほどの思いを注ぐこと、それが「愛」だ、と(「だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」ルカによる福音書 15:32)。

人間的な視点で見れば、怒る兄の方が正当で、父の態度は許せないかもしれません。また、「平等に扱いたい」と思うかもしれません。

しかし、神の愛はそれほど強いのです。神に立ち帰ろうとする者を決して見逃すことはないのです(「無垢な人の生涯を／主は知っていてくださる。彼らはとこしえに嗣業を持つであろう。」詩編 37:18)。

そしてパウロは、それほど強く、尊い愛を私たちも身に着けようと呼びかけます(「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。」コロサイの信徒への手紙 3:14)。

「互いに忍び合い、赦し合う」(「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。」コロサイの信徒への手紙 3:13)だけでなく、父がその子を思い続けるように相手のことを思うこと。自分の思い通りに相手が動かないとしても、なお信じて待ち続けること。一朝一夕には身に着かないことばかりですが、それでも、諦めることなく愛の関係を築く努力をし続けること。それが、神が求めておられる私たちの生き方です。

そして、私だけでなく隣人も、そのまた隣人も愛を身に着け、行動するようになる時が来ます。その時、「愛は、すべてを完成させるきずなです」(コロサイの信徒への手紙 3:14)とパウロが言った意味がわかってくるでしょう。「愛」無くして人間の関係は築くことはできません。

「愛あればこそ、世界は一つ」。全ての者がそう実感できる世界を共に造って参りましょう。